

「日本語表現」の実践報告 ― グループワークを中心に ―

藪川 恵理子

近年、大学では初年次教育や卒論執筆等に向けた学部教育として「日本語表現法」などという名称で、日本語リテラシー教育が行われている。ここでは本学教育学部人間発達科学課程日本語教育コースのコース基本科目として開講した「日本語表現」の授業についてその実践報告を行う。日本語を書く作業の後には、それをより良いものにするための添削が必要不可欠であるが、それを宿題については教員が行い、授業中には学生同士のグループワークを通して課題の修正作業を行った。その活動を通して学生が何に気づき、学んだか的一端を紹介する。

キーワード：日本語表現、グループワーク、双方向、添削指導、実践

1. 日本語リテラシー教育をめぐる状況

大島（2006）は「近年、大学における日本語表現の教育の重要性が指摘されるようになってきている」と述べているが、筒井（2008）は、その先駆けは、「1970年代から学習院大学元学長木下是雄が提唱した『言語技術教育』である」とする。そして日本語表現法新設の動きが出てきたのは、「1993年富山大学『言語表現科目』の開設が全学的な取り組み（選択必修科目）としては最初の試みである。この科目は、大学入学初年度に、読む、書く、話す、調べるなどの学問のベイシック・スキルの向上を目的として行う少人数形式の演習授業である」（筒井2008）としている。その後、「1997年高知大学の『日本語技法』開設は、全学必修科目という組織的な完成形を達成した」（筒井2008）という。このように、日本語表現法の組織体制が整備され、さらに、授業内容の改善として、筒井（2008）では、名古屋大学高等教育センターが授業秘訣集「成長するチップス先生」を公開したことや、東京海洋大学が「日本語表現法」を開設し、日本語教員と学部教員がペアでチームティーチングするという新しいタイプの授業方式を始めたことを挙げている。また、橋本（2009）は、「日本語リテラシー教育に関する目標・内容項目・手法についての知見が蓄積され」とし、「ドリルに重点を置いた野田・森口（2003）（2004）、グループワークの有効性を重視した大島（2005）などのようなテキストも刊行され、教材にも有益なバリエーションが広がってきている」と述べている。

2. 授業の概要

「日本語表現」は、人間発達科学課程日本語教育コースのコース基本科目として、2～4年生を対象に開講さ

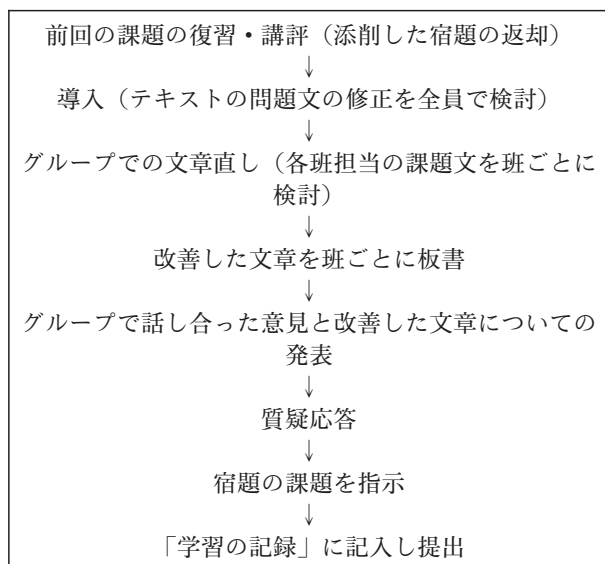
れている。筆者は、2010年度から担当し、2010年度は3年生1名、2年生10名が受講し、2011年度は2年生が11名（うち留学生1名）、特別聴講学生2名（2名とも留学生）が受講し、4年生が1名聴講した。

教科書は、偶然の一致であるが、前節で橋本（2009）が挙げた本、2010年度は大島他（2005）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』を、2011年度は野田・森口（2003）『日本語を書くトレーニング』を使用した。大島他（2005）は、学生一人一人が実際にレポートのテーマを自分で選ぶところから始め、目標設定、文章の組み立て、パラグラフを書く、本文を書く、引用する、というようにレポート作成に必要なスキルを身につけながら、一つのレポートを完成させ、最後に口頭発表するところまで行うものである。大学で学ぶこと、レポートを作成することに関する技術を体得するには格好の教材だと思えたが、実際に使用してみると、学生がレポートのテーマを決めるまでにかかなり時間を要し、構想をマップにしたり、情報をカード化したりする作業が順調にいったとは言い難い。そこで、2011年度は、教科書を換えて授業を行った。野田・森口（2003）で取り上げられているテーマは、アカデミック・ジャパニーズと言うよりは、非常に日常的なものばかりである。大島他（2005）は、半年をかけて一編のレポートを作成するのであるが、野田・森口（2003）は、毎回メールやメニュー、交通案内、企画書など日常的で実用的なテーマの文章例がいくつかあり、それを学生自らが修正し、毎回発表するという形式である。この教科書の初めにもあるように、「原稿用紙の使い方とか、敬語とか、文の長さとか、そんなことばの表面的なことは、あまり出てきません」と記されており、知識を与えるものではなく、自分たちが問題点を発見し、それを解決することが要求される内容となっている。この教科書の主眼点は、「読んだ人が不快に思ったり誤解したりしない日本語が書けるように」なることである。伝えたい情報や自分の考えを、いかに他者に誤解されず

に分かりやすく伝えるかということ、文章を書くとき最も重要なことだと言えるだろう。そこで、本稿では2011年度の授業実践と学生の気づきについて述べることにする。

3. 授業の内容

本授業の進め方は下の図のとおりである。



問題点の発見、修正、発表は、主にグループワークとして行った。宿題の講評後、1~2題の課題をクラス全体で読んで、問題点を学生に指摘させ、ウォーミングアップをする。そのあと4~5人ずつのグループに分け、班ごとに修正作業を行うのであるが、話し合いの議長、書記、発表者、板書担当を1名ずつグループ内でまず決めて行った。班分けは、留学生や男女が偏ることなく、なるべく毎回異なるメンバーになるよう、教員が行った。板書係が書いた修正案を見ながら、発表者による修正箇所や修正意図などの説明を聞き、最後に質疑応答をする。ただ、質疑応答は活発とは言えず、ほとんどが教員の講評のような形で終わってしまった。正解・不正解という形で指摘するのではなく、自発的に学生に気付かせるようにするが、どうしてもこの課題ではこの点には気づいてほしいという所だけ、教員の方から指示する。

以下に毎回のテーマを載せる（試験は行わないため全14回の授業の予定であったが、台風で1回休講になったため13回授業を行った）。

- 第1回 お知らせのメール
- 第2回 レストランのメニュー
- 第3回 注意書きやサービス案内
- 第4回 お願いのメール
- 第5回 お店やイベントの広告
- 第6回 わかりやすいマニュアル

- 第7回 場所や交通の案内
- 第8回 企画や提案を出す
- 第9回 ニュースレターを作る
- 第10回 アンケート用紙を作る
- 第11回 掲示板やメーリングリストを使う
- 第12回 日本語弱者のことを考えて書く
- 第13回 レポートや論文を書く

4. 学生の気づき

授業の最後に、「学習の記録」として、①授業で印象に残ったこと、②一番興味があった話題、③感想・質問を記入し、提出させている。以下に幾つかの授業を取り上げ、そこに書かれていたことの中から、学生の気づきを抜き出して記す（表記は原文のまま）。

〈レストランのメニュー〉

Fさん：客（相手）の立場になって考えるということが大切だと思いました。

わかりやすくするという事は難しい!!

OTさん：書いた人にとっては、全てわかっているでも読み手にとっては分からないこともたくさんあると思いました。

Yさん：伝わりやすい文章はどんなものかこれからも考えていきたいと思います。

Sさん：他の人の意見を聞くことがこの授業では多いのですが、自分では思いつかなかったこともあったのでおもしろいです。

Hさん：読む側の気持ちを考えて書くことはとても大切なことだと感じた。

OGさん：一見普通のメニューなのに、よく考えると、いろいろな問題点・改善点が見つかるんだということ（興味があった話題）。

〈注意書きやサービス案内〉

Aさん：看板でも手紙でも日記でもまわりくどく書くより、簡潔に書いた方がわかりやすいので、気をつけようと思った。

Yさん：注意書きにもいる情報、いらぬ情報もあり、分かりやすく伝えるには色々な工夫が必要だと思いました。

Fさん：他のグループのグループワークの解答、自分と違った視点で書かれていて、いろんな考え方があるのだと思いました。（中略）自分の考えたものが正しいわけではなく、多様な考え方があるのだと思いました。

OTさん：誰が見ても理解できるように文章を考えるのも大変だったし、他グループの発表を見ても難

しいと考えさせられた。

I さん：一見分かりやすそうな貼り紙、看板でも、客観的に見る人の立場になってみて考えると、あいまいな所・不明確な点が見つかることがあるということに気付きました。

TN さん：今まで看板なんて何気なく目を通していただけ、どんな情報がみやすいか、また、すぐに内容を理解できるかなど、看板という小さなものにどの情報が大切なのかを取捨選択してつめこむことの大切さを学んだ。

K さん：誰が見てもわかりやすい表示を作るといことは非常に難しいことなのだ実感しました。ただただわかりやすい表現に置き換えるということだけではなく、文字や色、レイアウトなどもわかりやすくする手段としては有効なのだと思います。

〈お願いのメール〉

F さん：日本人は断るのが苦手なので、今回断りの文章をつくるのも難しかったです。

Y さん：同じ内容のメールでも送る人によって自分の紹介を変えたりするのも忘れてはいけないと思いました。

人のお願いに対して断るときはしっかりと代案を考えることも必要だと思いました。

H さん：相手に伝えたいことを明確に端的に表すことは大切だけれど、断るときなどは相手を傷つけないように配慮することも大切だし、相手が納得するよう理由もちゃんと述べなくてはならないと思った。敬語はラフなメールであっても先生にはちゃんと使わなければならないと思う。

TK さん：本の題名に『 』をつける（印象に残ったこと）。

OG さん：丁寧に書けばかくほど、文が長くなってしまい、下手をすると読みにくい文になってしまうということ。

S さん：目上の人への頼みごとをするときは、敬語を使いますが、その敬語の使い方について考えたことが印象に残っています。

K さん：メールは表情が見えない分、普段話すとき以上に気をつかわなければならないと実感した。現代人にとって、メールは手軽なもの、というイメージだけど、短い文に全てをつめこむという点においては、すごくむずかしいし、配慮も必要だから、手軽とは言えないと感じました。

TN さん：お願いのメールをする際、どういう情報があれば、相手が納得して、こころよくひきうけてくれるかを考えながら文章を作成したこと（印

象に残ったこと）

Cc というのを知りませんでした。

見やすい（読みやすい）を目標にした課題とはまた違って、「依頼」するという気持ちに重点をおかなければならない文章だったので、受け取った側がどう感じるか、を考えることが難しかったです。

I さん：先生へのメールを書き直すときに、敬語はどのように使うといいのか、どうすれば失礼のない文になるのかを考えるのが難しかったです。

OE さん：メールの書き方を知りました。相手が違うと、メールの構成と言葉も違います。目上の人にメールを送れば、正式な書き言葉を使わなければなりません。

ほかの人をお願いする時、理由とか感謝の気持ちとか、ちゃんと表したほうがいいと思います。件名はいつも忘れなくて、これから注意します（留学生）。

〈お店やイベントの広告〉

A さん：ご（お）～するの謙譲の表現の使い方が難しいと思った。

すべての必要な情報を入れて、簡潔に人に紹介するのは本当に難しい。

S さん：他のグループの発表を見ていると、すごいなあ、よく気づくな…ととても思います。私も小さなところまで気づけるようになりたいです。

TN さん：他の人にみてもらうのにはいろいろな気遣いが必要だと思いました。

OT さん：広告もチラシも、誰のために、何の目的で作るのか、相手が見てどう思うかを注意して、作成すべきと思いました。自分の目線にとらわれず、いろんな角度から見て情報を提供しなくてはいけないと思いました。

OG さん：この情報はいるのか、いらぬのか、また、この情報を加えた方がいいのか、加えてしまったら、分かりづらいものになってしまうのかなど、情報の追加・削除についてとても考えさせられる活動となりました。

K さん：まぎらわしい表現が日本語にはおおいのだなあということ（印象に残ったこと）。

〈わかりやすいマニュアル〉

TK さん：誤字をなおしたり、必要な情報とそうでない情報をえらんたり、順番通りに説明したり、あいまいな文を明確にしたりするのが少しむずかかったです。

S さん：敬語の使い方（興味のある話題）。

I さん：敬語を自分がうまく使えていないことに気がきました。もっと普段から敬語に敏感になるべきだと思いました。

F さん：何のマニュアルをつくるにしても、使う人の立場になってマニュアルを作るということが大切だと思いました。

H さん：～年度の使い方について（印象に残ったこと）。

TN さん：そのマニュアルを見て何も知らない人を誘導するためには、普段自分が目をつけないところにも気を配る必要があると思った。誤字脱字を確認するときは細心の注意を払わなければならないと思った。

OG さん：敬語を話すことには慣れてはいるつもりでしたが、いざ、書くとなると敬語ではなく丁寧語になっていたり、「御」が抜けていて不適切な表現になっていたりしたので、相手に敬意を示しながらさらに注意して書くべきだと思いました。

K さん：箇条書きで表す方がわかりやすい場合があること（印象に残ったこと）。

〈アンケート用紙を作る〉

OG さん：どのようなものにしたら、アンケートに積極的に心良く協力してくれるのか、また、アンケートには氏名などの個人情報を入れてしまうと、協力しづらいということ。

OE さん：今回のグループで、始めて議長の役をしました。想像より難しかったです。

H さん：項目を作る際に答えやすいように配慮されたアンケート用紙にすること。
アンケートを作るのって意外と難しかったんだなと思った。

S さん：アンケートの目的。アンケートをとろうとしているだけで、意見を聞こうとしているという姿勢をアピールできるということは今日初めて気づいた（印象に残ったこと）。

TK さん：答える時に、質問の意味がわからなかったり、答え方がわからなかったりすることがあったのですが、実際にアンケートを修正してみて、自分達の期待する答えにむすびつくような質問のし方は、むずかしいということに気がきました。

〈掲示板やメーリングリストを使う〉

SM さん：掲示板などへの投稿は、個人情報を載せないほうがいい。また、質問する前に、まずは自分で調べたほうがいい。調べてもわからないところもあつたら、詳しく書いて質問する（留学生）。

SY さん：文章などを書く時、1マスあけることを必ず

守らなければならないと覚えます（留学生）。

I さん：気持ちの良い掲示板の書きこみ、メーリングにするには他に見ている人のことも考えて文章を考える必要があると思いました。

S さん：配布と配付のちがひ。このようなことばの使い方を知っておくことは大切だと思いました。掲示板への書き込み。一人だけが見ている場所じゃないという意識をちゃんと持って、責任ある書き込みをすべきだと思いました。

H さん：「先生」というのは敬称だから自分ではあまり使わないということについて（印象に残ったこと）。

TN さん：メーリングリストに返信する場合、どう書いたらよいかを考えること（印象に残ったこと）。

〈日本語弱者のことを考えて書く〉

A さん：子ども、お年寄り、外国人、すべての人にわかりやすく説明するのは難しいと思った。

K さん：日本人がわかりづらいただろうと予想する言葉と、外国人が実際にわかりにくいと感じる日本語の言葉の相違。私の予想外の言葉がわかりづらいつわられていることがわかって驚きました。
どれだけ内容を省くか、どのような言葉に置き換えればよいか、とても大変な作業でした。（中略）今回は中国の留学生と同じグループで特に勉強になったけど、漢字を使用しない言語が母語の人々にも話を聞いてみたいと思いました。

OT さん：日本語弱者は外国人だけだと思っていたが、子どもやお年寄りにもあてはまるのだと思った。

S さん：誰を対象にしているかによって単語もより簡単にしたり、簡単にしすぎてはいけないうちがあると思いました。

〈レポートや論文を書く〉

F さん：レポートの書き方には様々なきまりがあり、気をつけなくてはならないと思いました。

OT さん：レポートを書くときに注意すること。「重要だ。」と述べるにも、理由や根拠を述べないといけないうち（印象に残ったこと）。

Y さん：です～ます調とかをである調にしないといけないうちと改めて思いました。

H さん：同じ語形で方言だと気づかないということ（興味のあつた話題）。

文法的にもきちんと丁寧にしなければいけないけれど、それを意識しすぎて何が言いたいのかわからないようなレポートにならないよう気をつけるべきだと思いました。レポートは事実だ

けでなく、自分の考えも入れなくてはならないので、単に文献からの事実を述べるだけになってしまわないようにすべきだと感じた。

Kさん：レポートや論文の正しい書き方について、きちんと知らないのだと気づきました。

5. まとめと今後の課題

以上、「日本語表現」の授業の概要、進め方、学生の気づきについて述べてきた。

宿題の課題は、双方向授業となるよう教員が個別に添削したが、授業の中ではグループワークとして、各班の中で学生同士で課題の文章の修正案を練るという作業をした。このことによって教師が直すだけでなく、自分たちの力で話し合いによって、いろいろな視点に触れながら、よりよいものに変えていく過程を学んだと思う。人の意見に耳を傾けることの重要性と、他人は自分とは異なる視点を持っていること、意見を出し合えばさまざまなアイデアが生まれることを身を持って体験しただろう。以上のことがグループワークを取り入れたことによる利点だと考える。教員が文章を書くときの注意点を講義し、クラス全体が一斉にテーマを与えられて、書く作業をし、それを教員が添削するだけでは学生は様々な意見・視点に触れられなかったのではないか。だが、これでこの授業が十分であるとは言えない。今回はテキストに沿って授業を進めたが、その方法や内容が適切であっ

たかどうかは今後検討しなければならない。また、発表後の質疑応答があまり活発でなかったのは、改善しなければならない。基礎知識なしに文章の書き直し作業だけをやらせるのも効果的かどうか考える必要がある。まず初めに基本的な知識だけは、押さえておく必要があるかもしれない。たとえば段落の初めは1マスあけるとか、段落と段落の間に行を空けないとかである。最近ではメール式の文章の書き方をレポートでもする学生が増えてきた。これらのことは先に学生に知らせておくべきかもしれない。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 大島弥生他（2005）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 ― プロセス重視のレポート作成 ―』ひつじ書房
- 大島弥生（2006）「大学初年次日本語表現科目でのライティングのコース設計」門倉正美他編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- 筒井洋一（2008）「日本語表現法の意義と今後の展望」『言語』第37巻第3号 大修館書店
- 野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- 野田尚史・森口稔（2004）『日本語を話すトレーニング』ひつじ書房
- 橋本修（2009）「日本語学と日本語リテラシー教育」『日本語学』第28巻第2号 明治書院